# 鎖血の愛

森永パピ子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
鎖血の愛

【Ｎコード】
Ｎ６１９２Ｖ

【作者名】
森永パピ子

【あらすじ】
兄である清正に心酔している美乃。排他主義の彼が唯一寵愛するのも、また美乃ただ一人だった。
＊＊＊＊＊南晶先生の『禁断の兄妹シリーズ』に感化された短編です。しかし、良さはかすってすらいません。読者様の暇つぶしになれば幸いです。

男、と聞いて、美乃(よしの)が思い浮かべるのは、兄の清正だ。
無駄のない引き締まった筋肉を包む滑らかな皮膚。骨組みは今どきめずらしいほど太く、均整の取れた肉体に、面長で顎の尖った端整な顔立ち。鋭いが少し目尻がたれているのが、見つめられたときになんともいえない色気を匂わせる。

美乃が物心ついた頃、清正はまだ少年らしい薄い身体ではあったが、そこから立ち昇る鋭利な気配に怯えた記憶がある。口数が少なく、いつも薄めの唇を気難しそうにきつく結んでいた。
幼いながらに兄が家を嫌っているのもなんとなく感づいていた。共働きだったので、ほとんど一人か、兄と過ごす時間が多かったが、会話らしい会話をしたことがなかった。
時々傷を作って帰ってくることもあり、そんなときは母親が学校に呼び出され、相手の家に菓子折りを持って頭を下げに行っていた。怒鳴られるのは母親の郁美と連れて行かれた美乃だった。兄が謝ったのを見たことは一度もない。目を尖らせて詰る相手の母親に言いたいだけ言わせた後に、相手が清正にしたことを滔々と説き返し、黙らせてしまう。そして皮肉な微笑を浮かべて帰る。
美乃の手を引き歩く郁美が「一体誰に似たのか」とぼやくと「あんたじゃないことは確かだ」と返した。
美乃の手が、くっと握りしめられた。見上げると、母親が色が変わるほど唇を噛んでわなないていた。なんだか恐ろしいものを見てしまったようで、思わず俯いた。
清正は一人でも充分完成しているような風情で、風格さえ漂わせている。両親が彼を快く思っていないことも美乃は肌で感じていた。
美乃は気弱な性格もあって、なかなか友達が作れないまま小学校

にあがった。初めての夏休み。市の商工会が主催する恒例の花火大会当日の朝、新聞の折込チラシを見つめていた美乃に、清正がポツリと聞いた。
「いくか？」
普段あまり言葉を交わさない兄が、何故そう言ったのか理解できず黙っていると、チラシを取り上げられた。
「けっこうでかいんだぜ。この花火大会。あいつらどうせ仕事だし、おまえ見たいなら俺が連れてってやる」
返されたチラシを受け取り、花火大会の文字と、その向こう側で自分が焼いたトーストを頬張る少年を交互に見た。
「……いきたいなぁ……」
「じゃあ、今日俺がバイトから帰ってくるまで待ってろ」
指についたパン屑を払い、少年は席を立った。
「……本当に、連れてってくれる？」
「おまえがいきたいなら」
「ありがとう。おにいちゃん」
美乃は清正に笑顔を見せた。

その日、日中がとても長かったのを覚えている。
誰もいないいつものアパートの一室で、清正が帰るまでに、日記と観察記以外の夏休みの宿題を終わらせた。
日暮れ近くになると、一人で紙の着せ替え人形で遊ぶくらいしかすることがなくなった。清正が帰ってすぐにでも出かけられるように、玄関前の短い廊下に座って、ああでもないこうでもないと一人で何役もこなしながら遊んでいた。
六時半を過ぎた頃、ようやくドアが開いた。美乃は待ちくたびれて半分眠っていたが、鍵を差し込む音で飛び起きた。
「おっ、おかえりなさい！」
めったに出さない大きな声で清正を迎えると、彼は一瞬目を見張り、小さく笑った。

「ただいま」
背後から射す西日に照らされ、初めて向けられたその笑みはとてもきれいだった。

会場周辺はたくさんの屋台が軒を連ねており、進むのも困難なほど人が溢れていた。清正ははぐれないように手を引いてくれた。おいしそうな匂いがあちこちから漂い、人々の熱気と相まって、美乃を興奮させた。
「なんかほしいものあるか？」
訊ねられて、せわしなく辺りを見回したが、なにが欲しいのかわからない。何も答えないでいると、清正は独り言のように言った。
「腹減ったな」
朝から何も食べてないことを思い出した途端、空腹感を覚えた。
首を縦に振ると、そのまま手を引かれて屋台の前に連れられた。
そのとき食べた焼きそばとたこやきはお世辞にも上等とはいえなかったが、物珍しさと周りの雰囲気が手伝って、とても美味しく感じられた。
花火が始まると、清正は肩車をしてくれた。人込みの中で自分だけ少し高いところで花火が見えた。
「……おにいちゃんはみなくていいの？」
申し訳なく思いながら尋ねれば、
「俺は去年も見た」
と素っ気ない声が返ってきた。
一時間もの間、清正は美乃を肩車したままだった。そのうえ眠たくなった彼女を背負って帰った。背中の温もりがこのうえなく心地好かった。

家に帰ると、母親の金切り声で目が覚めた。
小さい子をこんなに遅くまで連れまわして何を考えているのかとひどい剣幕で清正を詰ると、乱暴に美乃を抱きかかえた。

そして、母は清正の横っ面を力任せに打った。おにいちゃんは悪くないのだと号泣しながら縋りついたが、聞く耳を持ってもらえなかった。

清正は無言のまま靴を脱ぎ捨て、自室に戻ってしまった。

おにいちゃんごめんなさい。何度も何度も襖の向こうに泣いて許しを乞うが清正が部屋から出てくることはなかった。

翌朝、母親の布団からでると、一番に画用紙とクレパスを開いて紙面一杯黒に塗りつぶした。夜を描こうとしていたのだが、そうしてしまうと花火の色が描けないことに後から気づいた。

そして真っ白なままの背景に花火を描いた。昨日のことを知らない人が見れば、それが花火の絵だと思わなかったのだろう。起きてきた母親は、きれいなお花ねと声をかけた。美乃は顔も上げず、うん、と返事した。

なにもしらないくせに、おにいちゃんにひどいことをした。こんな人とは目を合わせちゃいけない。

そう思いながら、花火の絵を描き続けた。画用紙一杯に色とりどりの線と点を描いて、下に大好きなピンク色で『おにいちゃんありがとう』とゆわゆわした線で書き足した。

バイトに向うギリギリの時間になってようやく清正が出てきた。いつも以上に仏頂面をしていたが、ようやく姿が見られて、美乃は飛びつくように兄にかけより、画用紙を掲げた。

「おにいちゃん、あのね、これ」

目の前に突き出された画用紙をみると、仏頂面が崩れた。

「実物より豪華だな」

そういって頭を撫でてくれた。母親が少し嫌いになり、兄の清正が誰よりも好きになった。

清正は高校を卒業しバイトを続けながら、地元の国立大学の経済・経営学部に通った。

左官をしていた父とスーパーマーケットでパートをしていた母は、

大学などに行かず就職して欲しそうだったが、断固として譲らなかった。学費を出し渋られ、彼は自分で作成した誓約書を持って親戚を訪ねて足りない分の学費を借りた。
兄が学業とバイトに追われ殆ど家に寄りつかなくなったのはつまらなかったが、美乃の誕生日とクリスマスには必ず彼女専用のケーキを買ってきてくれるので、絶対にさみしいとは言わないと決めていた。
そのうち、清正は大学を卒業して、叔父の口利きで保険会社の営業課に就職した。美乃は中学生になった。
就職し、ついに家を出てしまったが、市内の中心部に引っ越したので会いに行こうと思えばバスで二十分の距離だった。そしてなにより家にいたときよりも近くに清正といられるのが利点だった。引越しの手伝いをしに行ったとき、美乃は清正から合鍵を貰った。
「いつでも来ていい」
清正の声はいつもどおり素っ気なかったが、美乃は叫びだしそうなくらい嬉しかった。

日曜日は急な仕事が入らなければ彼も休みだったので、母親の視線も気にせず半日を共に過ごすことができた。朝十時に友達と約束があるからと母親に嘘をついて家を出て、午前中は清正に宿題を見てもらい、美乃が作った昼食を一緒に食べ、午後は清正が借りてきたＤＶＤを観る。そして夕方五時には部屋を出て、門限の六時前に家に帰る。
美乃は、もう習性となった日曜日の部屋通いに物足りなさを感じていた。部屋通いに飽きたわけでは決してないし、兄への思いは強まる一方だった。
最近では母親への嘘のバリエーションも増え、高校生になってバイトを始めると、出勤の三回に一回は嘘をついて、毎週水曜日にこの部屋に訪れるようになっていた。
もっとも、平日に兄の清正が美乃の制限時間内に帰ってくること

は滅多になく、夕食の作り置きだけして帰ることのほうが多かった。
今日は一日の殆どを一緒に過ごすことができる。胸がいっぱいになるのを感じながら、いつものように合い鍵を差し込んで、ドアノブを回した。
「お。はやかったな」
ドアを開けると、浴室から清正が出てくるところだった。
「だって今日はお母さんが私より早く出かけたから」
「ふうん」
「それよりちゃんと着るもの用意してからお風呂入りなよ」
「めんどい」
「めんどくさくないよ。パンツ一枚で部屋の中うろうろしないで。お父さんみたい」
「俺一人だったら全裸のときあるし」
「今私がいるでしょ」
「まだ九時半だぜ。おまえ来んのが早すぎなんだよ」
「だって……」
はやく会いたかったとも言えず、無言のまま清正の後に続いて部屋の中に入った。
「おふくろと喧嘩でもしたのか」
清正は振り返らずに訊いた。
「違うよ」
備え付けのキッチンと小さな冷蔵庫。ＤＶＤを観るためのテレビとソファ。そしてベッドしかない殺風景な部屋を見やり、兄のむき出しのままの背中に視線を落とした。
「ここにくるのだけが、私の楽しみなんだもん」
清正は聞いていないのか、クロゼットから出したスエットを着込んだ。
「ねえ。聞こえてる？」
「聞こえてないわけ、ないだろ」
ソファに腰を降ろすと、美乃が来るのを待ち構えるように視線を

よこした。目が合った途端、捕らわれる感覚に陥る。美乃は膝の上に乗りたいと思いながらも、遠慮がちに隣に腰を降ろした。
「学校楽しくないのか」
煙草に火を点ける。ジッポの金属音に続いて紫煙の匂いが美乃にまとわりついた。
「学校は楽しむところじゃないって、おにいちゃんを見てて思ったよ」
「俺は楽しかったぜ。塾いって必死こいてる奴らが俺の下にいたんだからな」
「性格悪い。そんなことのために勉強してたの？」
「んなわけねえだろ。俺はあいつらみたいになりたくなかっただけだ」
「あいつらって？　塾いってた人たちは別に悪くないじゃない」
「俺とおまえの親だよ。自分で努力もしねえ。こき使われる側に甘んじてるくせに不満ばかり言いやがる。あんな人間にはなりたくない。まあ、他の奴らも似たり寄ったりだったけどな」
「私も？　私もお兄ちゃんが笑ってる人と同じなの？」
じっと清正の目を覗き込む。彼の鋭い眼をまっすぐ見る人間はいない。清正は美乃を苦手だとさえ思う。真っ黒な瞳は澄んだ艶を表面に湛え、清正の言い知れぬ感情を煽る。
「美乃は自分でどう思う？」
まだ長い煙草をもみ消して、最後の煙を吐いた。
「……わからないよ。おにいちゃんがどう思ってるのかなんて」
「じゃあ、なんでおまえはここにいる」
返された視線の鋭さに気後れするが、それ以上に惹きつけられてしまう。もっと近くに行きたい。人を寄せつけようとしない彼の内側に行きたい。許される確信がある。美乃は引き寄せられるまま頬に手を伸ばし、被さるように密着して、薄い唇にゆるく自分の唇をつけた。
「わたし、ずっとおにいちゃんのものだから」

初めて清正が困惑しているのを見た。決して逸らされることのなかった視線が出口を求めるように彷徨った。
「むかしからそうだった。夏祭に連れてってくれたでしょ？　あの頃からずっとおにいちゃんが好き。でも、わたしはそれだけ。おにいちゃんがわたしのことどう思ってるなんか、ちっともわからなかったよ。でもね、それでいいの。それだけなんだもん」
一糸乱れぬ。それが清正の存在感だった。もちろん女を知らないわけではない。しかし、女に心を乱されたことなどなかった。気を許したことがないせいで、相手が去っていくのを当たり前だと思っていたし、それに対して気を病むこともなかった。しかし、美乃だけは手元に残して置きたかった。唯一、清正が慈しむことのできた相手。
純粋で従順な幼子だった妹が、愚直な女として目の前にいる。生まれて初めて畏怖を感じた。畏怖と呼べるかもわからない。清正が求めれば、美乃は禁忌も厭わず堕ちていくだろう。なにも知らなかった無垢な幼女が成長し、少女の顔で女を匂わせている。清正の中で雄が首をもたげた。
「美乃」
「なに？」
美乃は清正の胸に横顔を押し付け、ひっそりと呼吸をしている。互いの身体が微かに熱を帯びている。
「俺、東京に行く。秋の人事異動で本社勤務だ」
愛玩動物をあやすように背中を撫でると、美乃は嬉しそうな声を洩らして笑った。
「……いいなぁ。美乃も連れてって」
眩しそうな微笑を浮かべて清正を見上げる。いつかみた幼い妹の顔。そのくせ身体からは女の熱気が放たれている。
「学校はどうするつもりだ」
「辞めてバイトでもする。そしたらお金稼げるし」
「そういう馬鹿は好きじゃない。あのな、美乃。先に死ぬ確率が高

いのは俺だ。その時おまえはどうやって生きていく。中卒じゃまともなバイトはない。男に頼って生きるなら、それなりの価値がなければ駄目だ。価値の低い女には程度の低い男しか寄りつかない。おまえがそうなったら俺は笑うどころか軽蔑するぜ」
「だって、わたし、おにいちゃん死んだら生きなくったっていいもん」
美乃は上体を起こして、清正の首を両腕で挟んだ。
「でも、おにいちゃんに嫌われるなら学校もちゃんと行く。ちゃんと勉強して、お兄ちゃんと一緒のものをみて笑うわ」
「人に嫌われるぞ」
首を斜めに傾けて美乃を覗き込む。切れ長の黒目がちな大きな瞳。滑らかな艶を帯びた長い黒髪。一見地味だが細心の手入れが行き届いているのがわかった。
「他の人がどうだって言うの」
この柔らかな皮膚の下には同じものが流れている。突然変異した自分と同じ血。純粋な魔性の笑みを浮かべる唇を指でなぞる。
美乃はじっと清正を見つめる。彼の鋭い眼をまっすぐ見る人間はいない。清正は素直に愛しいと思った。真っ黒な瞳は澄んだ艶を表面に湛え、劣情に訴えかけてくる。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6192v/

鎖血の愛

2011年8月8日14時05分発行